

普通期米 育苗管理情報

～育苗管理の徹底により、健全な苗作り～

1. 田植までの作業目安

塩水選・種子消毒 → 浸種 → 播種 → 田植え
1日 6～10日(積算温度100℃) 25～27日

2. 播種の準備

①種子・・・1反に2.5～3kgの種子を準備する。

枝梗の多い種子については、播種ムラができるため、必ず枝梗を除去すること。(脱芒)

②床土

1) 糸島培土・・・床土約2.5kg、覆土約1.2kg必要。1反に3.5～4袋用意すること。

2) 山土・・・籾殻燻炭を土の量に対し1/3以上、育苗肥料20～25g/箱を混合。

3. 播種と管理

①塩水選・・・水10ℓに対し塩2.0kg (卵が斜めに浮く程度)で行なう。

その後は必ず水洗いする。(硫酸は2.6kg)

②種子消毒

1) スポルタック乳1000倍 (ばか苗病、籾枯れ細菌病)

+

スミチオン乳1000倍 (イネシンガレセンチュウ、胴切れ着色粒)

に24時間浸漬する。

※薬液は、籾1kgに1ℓ用意し、浸漬後の水洗いは不要。

2) 温湯消毒・・・60℃のお湯に10分間浸漬する。

お湯から上げた後は、すぐに水をかけて完全に全体を冷やす。(外が冷えても中は冷えていない場合があるので、十分確認する)

※いもち病、ばか苗病防止の為に確実に種子消毒は実施すること!!

4. 浸種・催芽

種子消毒後に浸種を行なう。芽(根)が出るまでに積算温度で100℃必要。

例) 平均水温が、15℃の場合は7日間の浸種が必要。

注) 播種前日にハト胸状態(芽が1mm程度出ている状態)になっているか、品種によりバラつきが無いがよく確認し、発芽が遅い場合は、風呂の残り湯(ぬるま湯)に漬けて、積算温度を上げ対策を行う。

催芽が出来ていないと、出芽、その後の生育のバラつきが出たり、資材被服期間の長期化による、カビ発生の原因になるので要注意!!

5. 播種

播種前に種籾を白くならない程度に乾かし、1箱（浸種籾）135g～140g程度で播種する。水は床土に十分掛け、覆土の上からはできるだけ掛けない。（覆土のクラスト対策）

●育苗期薬剤

苗いもち病対策として防除を行う。育苗期薬剤は残効期間が短く、育苗期間中の苗いもちの予防にのみ効果があるので、本田時期の病害虫防除は箱施薬剤にて処理する必要がある。

薬剤名	使用量	使用時期	使用基準
ビームゾル	150～500倍液 500cc/箱	緑化始期に均一に灌注	1回 ※劇物
カスミン液剤	4～8倍液 50cc/箱	播種後覆土前。播種した種籾の上から均一に散布	1回

※カスミン液剤は、福岡県認証の減農薬・減科学農薬においては農薬成分カウントされていないので使用に問題はない。しかし、JA糸島の特別栽培米（特裁米）や国の定める有機栽培（有機JAS規格）において農薬成分カウントは1カウントとなるので注意する事。

6. 出芽

①播種後、平床育苗とし、ラプシート1重（2重にすれば保温効果）又は、寒冷紗3～4重で覆う。

（寒冷紗の下に飼料袋等の厚手の紙で覆うと保温、乾燥防止効果）

②芽が3cm程度になれば寒冷紗1重にする。（この時期で苗の長さが決まる！！）

③寒冷紗を除去するタイミングは、1.5～2葉期の時点で夕方に除去する。

④水管理は、発芽ムラを無くすため、芽が出るまでは覆土を乾燥させない。その後は、できる限り午前中の内にたっぷり灌水する。

注）灌水する際は、必ず被覆資材をはぐってから灌水すること。

注）晴天の日は、ホース内に溜まっている水が熱湯になっているので、十分冷えているのを確認して灌水する。

7. 追肥

①施肥時期・・・追肥は、本田の活着促進のため田植前5～7日頃灌水と同時に行う。

②施肥量・・・硫安200倍液、又は、大塚ポット肥料300倍液を500cc/箱灌水する。

8. 病害虫

苗には、様々な病害虫があるため苗が少しでもおかしい場合はすぐに連絡を！

営農センター農畜産課 327-3912

育苗センター 324-2566

福岡普及指導センター 806-3400

までご連絡ください。